地方的地震に備へよ

三月三日の拂曉、突如として三陸地方に襲來した激震と、それに伴ふ大海嘯の被害は、意想外に甚だしきものがあり、死者二千餘名、流失及倒壞、燒失家屋一萬餘戸、流失並に破損船舶二千隻と報ぜられた。

同地方は既に深刻なる農村不況に祟られ、先には稀有の饑饉に見舞れ、今また天災とは云ひ乍ら、ほしいまゝなる震害に加ふるに大海嘯の暴威に襲はる。罹災同胞の艱苦は思ふだに痛恨限りなきものあり、まことに同情に堪へぬ次第である。

われ等は、既に若干の物質を投じて衷心同情の意を表し、その他有形無形の、人間としての慰問は講じたけれども、こゝに改めて技術者としてこの災害に如何に對すべきかを覺悟したい。

地震並に海嘯の如きは、不可抗の災害として、たゞその後始末的仕事にのみ努力され易い。而して稍もすれば來らんとするそれに備へることが周到でない恨みがある。勿論大正十二年關東大震災以來、耐震構造が長足な發展を遂げたことは誇るに足るが、それも主として都會的、ビルディング的に應用可能なるものであつて、今回の如き地方農漁村の災害に對しては、いまだ考へ至らざること甚だしいのである。然も地震は但馬、北伊豆、埼玉、而して今回の三陸地方と、殆んど我國の至る處に起つて來てゐる。地震國の名は玆に於て僞りでないのを覺えるのであるが、更に之に對して耐地震國の名を冠し得らるゝ日の速かならんことを切望するのである。

地震や海嘯そのものを未然に防ぐことは不可能であつても、之に耐えしむるわれ等の技術をして、たゞに都會的たらしめず、地方的災害に對しても、より眞劍に、より周到に考究されんことを希望し、且つ斯く覺悟すべきであることを提唱する次第だ。